

【発掘調査の成果】

当時の永原御殿の建築図面である中井家「指図」をもとに、「南之御門」推定位置に調査区を設定しました。この位置は、本丸西側に残存する土塁が途切れる地点に当たります。本丸の南辺では、「南之御門」の位置を境にして、東側の土塁が後世に破壊を受け、現在は存在しません。

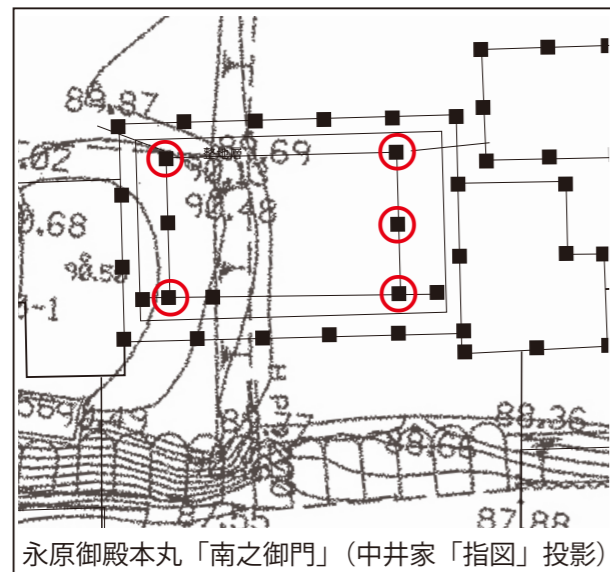
調査の結果、遺構では、門の柱を据える位置に存在した礎石を抜き取った痕跡を検出しました。具体的には、門の正面に向かって両側に配置される「親柱（本柱）」と、上部の櫓を支えるために奥の両側に配置された「控柱」の遺構です。これらの柱の基礎には、本来は大型の建物礎石が存在していましたが、門の廃絶後に抜き取られたものと考えられます。礎石が据えられていた場所には、沈下を防ぐ目的で礎石の下に敷かれていた「根石」を確認することができました。

さらに、門の東西両側は土塁が接続する構造となり、西側の土塁には石垣の下半部が残存していました。東側の土塁については、その痕跡は確認できませんでしたが、本来は西側と同じく門に接して石垣が築かれていたと考えられます。門西側の石垣には、大型の切り出し石材が使用され、表面にはノミ状工具によって丁寧な「ハツリ」加工がされていました。大型の石材が使用され、石垣の法面が平らに仕上げられており、将軍御殿の正門に相応しい石垣です。

その他、遺物では門の屋根に置かれていたと見られる瓦片が多く出土しています。

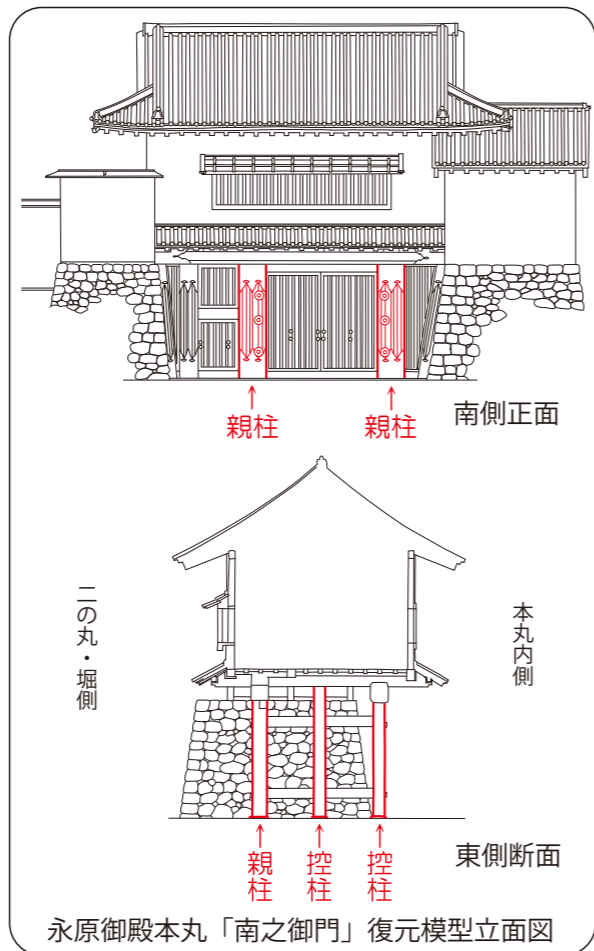
【まとめ】

今回の発掘調査により、中井家「指図」から想定できる位置に、実際に城門が存在したことが裏付けられました。ただし、後世の門の取り壊しなどによって失われた遺構もあり、門の構造を完全に復元するには至りませんでした。それでも、中井家史料の永原御殿に関する他の記録にも「南之御門櫓」などとあることから、「指図」から復元できるような櫓門が存在していたと考えられます。



▲赤丸○は今回の発掘調査で痕跡を確認した柱である。確認した柱痕跡で計測すると、門の正面の柱間距離は約5.5m、親柱から最奥の控柱までの奥行は約4.5mの柱間距離となる。

門西側の石垣は、現状で約0.8mの高さの残存であるが、本来は2.5m程度の高さが存在したとみられる。野洲市歴史民俗博物館の永原御殿復元模型は、中井家「指図」から建物を復元している。これらを参考にすれば、高さおよそ8m程度の櫓門が存在していたと考えられる。



国指定史跡「永原御殿跡」

本丸「南之御門」発掘調査現地説明会 資料

令和3年2月27日(土)  
野洲市教育委員会文化財保護課

【はじめに】

慶長五年(1600)、徳川家康は関ヶ原の戦いに勝利し、その3年後の慶長八年(1603)に江戸に幕府を開きます。ただし、それまでの政治の中心は上方であり、京都には朝廷と公家、大坂には豊臣家が存在しました。江戸に幕府を開いても、政局の動きによっては、上洛して関西で政務を行う必要がありました。

将軍の上洛は軍勢を伴った移動が常であり、駐屯には陣所や城郭が必要でした。このため、主要な江戸から京都までの行程で、大名の城郭などが存在しないところには、新たに「御殿」「御茶屋」が建造されました。

野洲郡永原は、京都から一日の行程にあり、徳川家康によって上洛時専用の城郭「永原御殿」が築城されました。寛永十一年(1634)には、徳川家光の上洛に合わせて全体の規模が拡張されています。

平成29年からの総合調査を受け、「永原御殿跡」は令和2年3月に国史跡の指定を受けました。令和2年度は、中井家「指図」に記される本丸「南之御門」の推定位置の発掘調査を実施しました。



永原御殿跡 位置図



永原御殿復元模型(野洲市歴史民俗博物館常設展示)本丸「南之御門」